

第3期総括詳報

教訓当事者から学ぶ

子どもたちへ伝承誓う



東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」の第3期は14回の講座を終え、72人が

若手社会人ら139人が登録した。修了者の内訳は学生68人、社会人4人。東北福祉大3年の内村大樹さん(21)、橋坂耀さん(21)、宮城教育大1年木村百花さん(19)が出席14回の皆勤賞、2人が13回の精励賞を受けた。

地を視察。全ての講座を通じて被災者、教員、医療福祉関係者、ボランティアら震災の当事者から被災現場や復興の教訓を学んだ。皆勤賞受賞者のうち、教員志望の木村さんは「どんな大人になりたいのか問い掛けられたように思う。いつどこで起きるか分からない災害を児童生徒にどう伝えるか、深く考えなければならぬ」と振り返った。

代塾推進協議会が運営する。構成団体は河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院大、東北工業大、宮城学院大、創生支援機構。

311次世代塾推進協議会は、第4期(2020年4月～21年3月)の受講生を募集しています。10代後半から20代前半までの高校生や大学生、社会人が対象で受講無料です。講座の概要を掲載したチラシを河北新報オンラインニュースで公開しています。QRコードでもアクセスできます。

連絡先は事務局の河北新報社防災・教育室022(211)1591、メールはjisedai@po.kahoku.co.jp



受講生の声

自分の目で確認

自分の目で被災地を見て、被災地の現状を知ることができました。特に大川小が印象に残ります。インターン生として1年間、次世代塾に参加してみても、ボランティア活動への関心が高まりました。(仙台市青葉区・東北福祉大2年・鈴木真羽さん・20歳)



多様な考え刺激

被災者の話を聞き、当時の気持ちなどを深く考えさせられました。他大学の学生と交流し、さまざまな考えを知ることもできました。若い世代が、震災を子どもに伝える必要があると思います。(仙台市若林区・東北福祉大3年・菅野萌愛さん・21歳)



復興は途上実感

震災の復興がまだ終わっていないことを実感しました。被災者の心は傷ついたので、大切なものを失った悲しみや津波の恐怖は計り知れません。多くの人に被災地の現状を知ってもらいたい。(仙台市青葉区・東北福祉大2年・武藤有沙さん・20歳)



「知らない」多い

仙台市内で震災を経験しましたが、知らないことがたくさんあることに気が付きました。被災地の現状を自分の目で見て、被災者の話を直接聞くことの大切さを感じました。(仙台市宮城野区・東北福祉大2年・大友唯衣さん・20歳)



人々の支え胸に

実際に被災現場に赴き、初めて津波で壊された学校や住宅跡地を見ました。震災9年を迎えた被災者の気持ちや、ボランティア団体が情報や人を集め、復興を支えていることも学びました。(仙台市太白区・東北福祉大2年・菅野里架さん・20歳)



地域の絆が大切

災害時の対応や復興には地域のつながりが大切だと感じました。インターン生として取材、執筆する中で、伝えたいことを強調する文章の書き方が勉強になりました。学んだことを発信したいと思います。(仙台市青葉区・東北福祉大3年・橋坂耀さん・21歳)



震災知識増えた

震災の知識が増え、視野が広がりました。学んだことを震災を経験していない人に伝えたい。他大学の学生や社会人との意見交換も楽しかったです。原稿の執筆は苦戦しましたが、いい経験になりました。(仙台市若林区・東北福祉大3年・橋本瑚都さん・21歳)



聞く大切さ認識

前年度に続き2度目の受講です。被災地の現状を知り、被災者の思いに耳を傾けることが大切だと再認識しました。防災・減災に関心を持つ若い世代がさらに増えてほしいと思います。(仙台市宮城野区・東北福祉大3年・内村大樹さん・21歳)

